
黒いかえる

花坂るい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒いかえる

【Nコード】

N0317I

【作者名】

花坂るい

【あらすじ】

黒いかえるを見たものは死ぬ…一体この地球はどうなっていくのだろうか…モモは戸惑う！！

1話

「キヤー！なんか出てきたよ！」

何年も使っていない古いジヨウロから

黒いモノが出てきた。

それは

かえる

だった。

くくくくくくくくくく

お母さんが買い物帰り。
怖い話をしてくれた。

母：「黒いかえるを見た人は…死んじゃうのよ！！アツハハハハ」

モモ：「黒いかえるなんて…色んな種類がいるかも！！」

母：「ううん。フツウの黒いかえるじゃないのよ！そのかえる君のお腹には、文字がかかれてあるんだって…そんなかえる…いないわよね！！」

母が雰囲気を変えようとしているのだろうか。

小学2年のモモでもそんなのわかる。

モモ：「黒い…かえるか…見てみたいな…1度だけ。」

そして2人でクスクス笑いながら帰った。

~~~~~

わたし、モモはもうすぐ卒業。

たくさんの友達を作っていい思いでも作った。

これで卒業…ちょっと悲しいけど

大きな第1歩を踏み出せる。

先生：「来週は…卒業式です。みなさん…」

先生は悲しいのか

嬉しいのかわからない表情を浮かべた。

タクヤ：「先生！！悲しいですか??!!」

（（アハハハ））

みんなが笑った。

モモ：「ねえ！！卒業式の後にさ…そのまんまの服でプリ撮らない  
っ??」

カオリ：「いいね！！いいこー!!」

ユカ：「さんせーい」

エミリ：「あたし可愛い制服着ていこー」

～卒業式～

代表者：「下級生のみんな…グズツ…今まで…ズズツ…ありがとう  
ございました…!!」

代表者のエミリは大号泣。

カオリ：「ほらほら、泣かない泣かない!!」

と言ってるカオリ、泣いてる。

すると、1年生の子が

「キャー!!かえるだわ!!」

（（ざわ!!））

『かえるだつて?』『窓もドアも開いてないのに?』『ざわざわ...』

先生が取るうと苦勞してたけどなかなか捕まえない。

まるで透明なかえるで先生の手をすり抜けてるみたいに速い...

そしてモモも近づいて見てみると...

そのかえるは真っ黒だった。

まるで墨を流したかのように...

モモ：（...黒い...かえる...?）

モモは何か覚えのあるような気がした。

モモ：（黒いかえる...黒いかえる...ハッ!!!!）

昔、お母さんと話したことを思い出した。

『黒いかえるを見た人は…死んじゃうのよ!!アッハハハハ』

モモ：（死ぬ!?!ヤバイ!!）

モモはすぐ友達に教えた。

みんな大騒ぎ。

モモ：「待つて!!みんな!!ちょ…」

誰も話を聞こうとしない。

すると

（ガタタタタタタタ!!）

大きな地震だ。

周りの人：「キャー!!地震——!!」

エミリ：「いやー!助けてっ…」

モモ：（え!?!なに…これ…足が…動かない!!）

するとモモの背中に氷を流したような感触がした。

モモ：「ひゃっ」

そして地面を見ると…

黒い

かえるが

こっちを見て。笑っているようだ。

足や手がゾクゾクする。

モモ：（へ…助けて…）

まだ揺れは続いている。

すると誰かに押されたかと思うと、かえるはいなくなり、地震もおさまった。

周りの人：「怖かったー！！」

泣くこもいた。

一体

あのかえるは

何者なんだろうか

く続く

## 2話

それから

黒いかえるもいなくなつて

騒ぎもおさまつた。

エミリ：「キモかつたねゝかえるとか！」

モモ：「確かにゝゝゝ…」

カオリ：「びつくりしたよねゝいきなりいるんだから…」

近くのデパートに行くバスに乗つてゐる間、話していた。

ユカ：「それよりさゝ

今日、どこのプリで撮る？」

モモ：「“魔法の美”じゃない？そこ写りいいしゝ」

そして“魔法の美”の前に来た。

ユカ：「じゃ、1人100円ずつね」

そして、エミリ、ユカ、カオリ、モモと100円ずつ入れた。

『それでは、撮るよ♪3!!2!!1!!』

と、プリクラ機から流れてくる女の子が言った。

『カシャ!!!!!!』

大きな壁から光が出てくる。

その瞬間

（（ズキイ!!!!））

モモの頭にカミナリが落ちただろうか。

モモ：「痛っ!!!!!!!!!!」

カナヅチで叩かれたような痛みが…

ユカ：「大丈夫!?どうした???!!」

エミリ：「光強かった?」

カオリ：「何?どした?」

まだ頭はズキズキする…。

モモ：「なんか…カナヅチで叩かれたような…痛みが…あたっ、頭に…」

そしてモモはプリ機の近くで休んで

後の3人が、写真にラクガキしてくれた。

カオリ：「4人分にわけれるようにしたよ。今わけていかない？ハサミあるから」

そして切り終わると、帰りのバス停の所に向かった。

エミリ：「まだ痛い？」

モモ：「んゝ…まだちょっと痛い。けどさっきよりは…大丈夫。」

そしてバス停のベンチに座った。

しかし、何かおかしい。

モモが誰かに見られているような…

モモ：（なんなの…この恐怖感…？）

するとまた頭痛が走った。

モモ：「痛っ！！！！！」

次はベンチから転がり落ちて横たわってしまった。

カオリ：「モモ！？大丈夫！！！？！？ちょっと…！」

エミリ：「モモ！！これ病院行った方がよくない！！！？？つれていこうか？」

ユカ：「大丈夫！？」

すると、近くにいたおじさんが近づいてきた。

おじさん：「どどど、どうしましたか？」

そのおじさんは白衣を着て、黒いバッグを持っていた。

おじさん：「私は、近くの病院の医師です。守山です。どうしましたか？」

ユカ：「あー！守山先生！！あたしのおばあちゃんを担当してる先生だ！」

おじさんはニコリと笑った。

カオリ：「守山先生…モモが…さっきから頭痛いって言ってるんです！！カナヅチ…で叩かれたような感覚って言ってます。」

守山：「そうですか…貧血では無いですが…一度病院へ行きましょう。」

するとモモの口が勝手に動いたように…

モモ：「うるせい！！…ふざけるな…病院なんぞ…行くものか！！！」

4人はびっくりした。

カオリ：「モモ？どうしたの？」

モモはゆっくりと立ち上がって、自分の持っていたバッグを踏んだ。

ユカ：「あ！！モモ！！それおニューのバッグじゃないの！？」

モモは

何かに

操られているかのように

どこか

歩いていった。

### 3話

カオリ：「ちょっと！！モモ待つて」

いつの間にかモモはいなくなっていた。

ユカ：「どうしたんだろ…」

エミリ：「モモ置いて帰るわけにはいかないし…」

そしてちょうどバスが来た。

エミリ：「バス…来たよ…」

ユカ：「あたし…乗る！…！」

ユカは突然バスに乗った。

エミリ：「ちょっと！？ユカ！？モモは！？」

そしてカオリも

カオリ：「じゃ。エミリは後から来な？」

その瞬間

（プシューーーー）

バスの扉がしまった。

エミリはバスに乗っている2人を戸惑うように見た。

バスは行ってしまった。

エミリ：「なんなの…」

すると後に人の気配が…

振り返ると目の前にモモが。

エミリ：「キャー！！！！」

モモ：「あたし…今まで何してた？」

エミリ：「へ…？」

モモ：「頭痛がしてから…それから記憶がない！！！」

エミリ：「えーっと…頭おさえながら転がって…しばらくしたら起き上がって…自分のバッグ踏んで…どっか行って…今ここにいます…  
・みたいな」

エミリは恐る恐る言った。

そしてモモは周りをキョロキョロした。

モモ：「…カオリとユカは？」

エミリは黙った。

モモはボーゼンとした顔をしている。

すると突然

周りの人：「火事だー！ーあ！！！！！！」

その声と共にコゲくさい臭いがただよっている。

モモ：「火事！？」

エミリ：「キャア！！！あそこのマンション燃えてる！！！！」

周りの人はパニックになっていた。

モモ：「あのマンションの中には人いるの!？」

エミリ：「わかんない…ゴホッゴホッ臭い…」

ついにエミリは立てひざ状態になった。

エミリ：「ゴホッゴホッ…ゲホッゲホッ…」

モモ：「エミリ!？大丈夫!？」

しかし炎はどんどん大きくなる。

それと…

炎はマンションから近くの木へ…木からその隣の木へ…と、どんどん増えていく。

モモ：「ヤバイ…」

とうとうエミリは倒れこんだ。

モモ：「エミリー!!」

そしてモモは自分のポケットからハンカチを取り出すと、エミリの口に当てた。

すると1人の女性が来てくれた。

女性：「大丈夫ですか?!」

30代くらいの女性だった。

モモ：「炎が近いから…たくさん煙を吸っちゃったんだ…」

女性：「大変ね…大丈夫。私が運んで逃げましょう!!」

そして女性は軽々とエミリを持ち上げると、

走り出した。

女性：「早く!!!あなたも!!」

モモも走り出した。

その女性は、現場からかなり離れたデパートの入り口のベンチに来了。

女性：「もう大丈夫です。けどこの子は一度病院に行きなさい。」

モモ：「ありがとうございます！！本当に……ありがとうございます」

そしてその女性は歩いていった。

その後エミリは、エミリのお母さんが迎えに来て病院へ行って1日入院したらしい。

モモは、そのままバスで帰った。

く春休みく

モモ：「おはよ……」

お母さん：「おはよー！」

トーストのいい香り…フライパンがジュージューいつている。

テレビではニュースがやっていた。

アナウンサー：『おはようございます。8時のニュースです。

5日前、〇〇市の マンションで火事があった時の目撃者から、  
インタビューが来ました。その時の映像をどうぞ。

“ Q・燃え方はどうでしたか？ A・すごい勢いがありました。

Q・その後炎が色んな場所に移った…というのは、どうでした？

A・すごかったですよ。火が木からその隣の木へ…というように。

”

とのことでした。

その火事での死者は25人です…。」

あの女の人インタビューされていた。

アナウンサー：『それでは、被害者の田中千恵子さんにお話を聞きました。

“ 私ねえ、あの時死ぬかと思ったわ。火がいきなり出てきたの。

燃えそうにない所から。

だって、テーブルから出てきたんだもの。必死で消火器を使ったけど、

消火器だけじゃ足りなかったみたい。ホントに死ぬかと思った。”

その後になんと不思議な話しが入った。

『 “けど、何かおかしかったのよ。炎の動きが。” 』

モモ：「…？」

『 “私、台所にいたんだけど… なにか黒いものが動いてたの。小さいもの。” 』

最初、虫かと思って放っておいたんだけど…

そこから炎が出てるように見えた。” 』

モモ：「…は？…。」

モモ：「まさか…黒いかえる!？」

まさかと思ったが・・・？

## 4 話

モモ：「そんな…まさかでしょ？」

お母さん：「何一人でブツブツ言ってるの。早くご飯食べちゃいなさ〜い!!」

アナウンサー 1：「驚きですね!!いきなり燃え出すとは。」

アナウンサー 2：「怖いですね…なにかの空気現象でしょうか？」

その事について専門家に聞きました。」

専門家：「ゴホン。千恵子さんが言ってた、“テーブルから火が出た”というのは、いくら木製でもそんな事はありません。」

もしそこにライターや、チャッカマンがあつたのなら、それはあり得ますね。

前使つてたとき、ずっと押ささつたままだとか…」

アナウンサー 1：「との事です。しかし千恵子さんに再び伺うと、テーブルにはライターなどは置いていない、とお答えしました。

一体、千恵子さんの部屋はどうなっていたのでしょうか。

今もまだ、調査中です。

・・・次のニュースです・・・」

モモ：「そんな…そんな、まさか…」

モモ：「お母さん！！！！！！」

コップにお茶を入れていたお母さんが驚いた。

お母さん：「わ！びっくりしたじゃないの。どうした？」

モモ：「む、昔、黒いかえるの事話してくれたでしょ！？」

お母さんは一瞬呆然とすると、  
うなずいた。

モモ：「きつとそれだ…！！！！黒いかえるが色んな事件を巻き起こしてるんだ！！」

その後、色々なニュースが相次いだ。<sup>あいつ</sup>

『今日をもって、コンビニ強盗は日本で15件…』

『〇〇山で山火事があり、15時間後に炎は消されました…』

『〇国で、震度7の大地震がありました。それにより、死者37人…』

その他にも悲惨なニュースが1週間…2週間と毎日続いた。

モモ：「なんなの…今のニュース…」

モモが不思議に思ったニュースがこれだった。

『1日に、世界で30人ほどの行方不明者。1週間前から続いており、1週間前から行方不明者は210人と爆発的な人数に及びました。』

行方不明者が210人もいるようだった。

『イタリアのダン・ケーさんによると、“ゴミを出しに行きたきり帰ってこない”。

アメリカの〇〇州の、ダニエル・ランエルドさんの場合、

“一緒に旅行へ行つて、ホテルで寝ていて、朝起きると荷物も携帯も財布も全部置きっぱなしでいなくなっていた”との事です。

韓国の、ヨン・チュミーさんの時は、

“うちの子供が、友達の家遊びに行つて…それから帰つてこないんだ！！その遊びに行った友達の家で、『今日うちの子が行ったかい？』と聞いたら、来てないっていうんだ！！”

などと、世にも奇妙な事が起こってしまいました。』

その後も、どんどん行方不明者がいなくなり、

1ヶ月でなんと、930人もの行方不明者が出た。

張り紙をしても1人も見つからない。そしてついに、モモの友達…カオリまで…。

モモは恐ろしくなった。部屋から出たくなかったし、ずっと家族と一緒にいたかった。

絶対、絶対家族だけはいなくなつてはいけない！！！と思っていた。

その1カ月後…行方不明者は合計で1860人に達した。

お母さん：「どうなったの！！この世界は！！！」

お母さんは泣きわめいていた。

モモは恐ろしさのあまり、涙も出ない。そのかわり震えが止まらなかった。

そしてとうとう…親友だったユカまで。

その1カ月後行方不明者は、2790人になった。

また1ヶ月経つと…

3720人…

4620…

5520…

6420…

モモの友達はすべて消えていった。

7320…

8220…

9120…

とうとう10000を超えた。

10020…

10920…

ニュースのアナウンサー、学校の先生、親戚のおばさん、モモのおばあちゃん、ユカ、カオリ、エミリ……。

どんどん減っていった。

大統領、モモの好きだった歌手、お父さんの会社の社長……

近くの喫茶店の店長さん、モモの好きな人、おじいちゃん。

いつも挨拶してくれる近所のマチコおばさん。

20000……30000と世界の人たちの人数が消えていく。

50000……

そして、ポストの郵便物を取りに行った……

妹まで……

この世界はどうなったのだろうか!!

#### 4 話（後書き）

こわいですねー

## 5話

出かけるときはなるべく家族で出かけた。

モモの親戚の人々はすべていなくなってしまった。

その次の日も… またまた次の日も…  
どんどん消えて行った。

ニュースのアナウンサーもいない。ラジオのアナウンサーもいない。  
ニュースも見れないし、電気も使えない。

それでも、お父さん、お母さん、モモで生活していた。

とうとう、台湾の人々が全滅した。

誰もいない台湾の島は、静かだった。

財布も家具も本も車も自転車も…  
ドアの鍵も使えない電話も、すべておきっぱなし。

ただ、人類が減って行くだけ……。

モモが住んでいる日本にはまだだいぶ人が残っていた。

元日本の人口数は、1億300000000万人だった。

それが今の人口数は30000000万人になった。1億人の人々が行方不明になった。

お母さん：「ああ…どうしたのかしら…」

お母さんは毎日毎日、ずっとずっとずつつぶやいていた。

もうこれ以上出ないというほど涙を流しているお父さん。めったに泣かないお父さんがこれほど泣くのを初めて見た。

モモは泣く…というより、精神がおかしくなったのだろうか…

ずっと椅子に座って天井に向かって笑い続ける。

街の人々もみんなどうかしたようだった。

ボーっとして歩く人、草をむしり続ける人…  
悲惨だった。

ついに北海道の人類が全滅した。

北海道の人口は500万人いたが…それが…

どんどん人類が滅んでいった。

## 5 話（後書き）

怖いですね

## 6 話

ついに、北方領土が無くなった。

そして、沖縄まで…

日本に人類が残っている事が、アメリカの隊員の耳に入ると大きな飛行機が来て、

一番人口がいる所へ避難させる。

モモの家族3人もその飛行機に乗った。

飛行機の中は静かだった。

コソコソ…と少し話し声が聞こえるがにぎやかではなかった。  
旅行の時の飛行機…とは違うようだった。

着いたのはアメリカだった。

そこにはいつものような、東京のにぎやかさがあつた。

3人はホっとした。

しかしホっとするのは一瞬のうちだった。

くくくく

色んなホテルが満室だった。

その中に3人の部屋がギリギリあった。

そのホテルは、今でも壊れそうな古い旅館のようだった。

けれど、寝泊りできるだけでも幸せに思い、泊まる事にした。

次の日、モモは起きてビックリした。

両側に寝ていた、お父さん、お母さんがいないのだ！！

モモは驚いた。

モモ：「あ…れ…？」

モモは思わずフツツと笑った。

そしてホテルから外を覗いてみた。

モモは足が震えた。

その街には、

昨日の騒がしさがなく

モモしか人類がいなかったのだ。

くくくくく

モモはふらついて、

テーブルに手をついた。

冷や汗が出てくる。次々と。

モモ：「なんで…なんでよ…」

そして汗を手でふくと、部屋から出て、階段を駆け下りた。

ホテルから出ると、そこらへんを駆け回った。

開け放たれたドアがある家に入って、辺りを見回しても誰もいない。

携帯電話も開いたまま置いてある。

お風呂のドアも、中途半端で開けっ放し。

ベッドの布団もグチャグチャ。

電話の受話器も、ダラーンと垂れっばなし。

モモは急に寂しくなった。

ついにモモは

走りつかれたのだろうか。

地面に膝をついて、

頭を地面に置いた。

そしてため息をつくと  
起き上がった。

その瞬間、

（（ズギン！！！！））

昔、卒業式の時に来た頭の痛みが来た。

モモ：「また…だ…。いたっ…」

そして5 mくらい先に黒いかえるが座っていた。

モモは身体力が抜けて

ドタツと倒れた。

そしてゆっくり目を閉じる。

空の雲が無くなってきた。

こんな晴れた日が今までにあっただろうか。

黒いかえるが少し

笑ったように見えた。

## 6話（後書き）

最終回です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0317i/>

---

黒いかえる

2010年10月28日05時31分発行